



オルステン城内廊下のコペルニクスが観測したところ（左より館長、筆者、ガイド）

ませんので”と断わりながらタドタドしい英語で説明を始めたのですけれども結局はパニ・クシャのポーランド語の通訳になってしまいました。コペルニクスはこのフロムボルクを“*The most distant corner of the world*”と呼んだということです。神父さんはコペルニクスの記念祭壇の前に案内しました。実に豪華な祭壇です。で“この下がコペルニクスの墓ですか”と聞くと、“いいえ、墓はこの寺院の地下にあったのですが、今は何処にあるやら判りません”との答で、何でもコペルニクス死後——17世紀の30年戦争の頃でしょうか——戦乱でこのカテドラルが灰燼に帰し、その際、下っぱの一司祭の遺骨などは無縁物のようなもので、何処に捨てられたのか、今では全然判らないということでした。

(226頁よりつづく)

様に、中世ヤルネサンスの解明には、例えば今発刊中の“*Geschichte des Arabischen Schrifttums*”(F. Sezgin)は計り知れない価値を持つであろう。それは、これらが決算的体系書だからではない。その無限ともいべき材料により、今後の全ての論文が始点とすべき水準を組織的に示しているからである。これは、決して無視され得なかった Tycho の観測と新理論の関係に類似している様

午後4時過ぎフロムボルクを後にして、途中少し寄り道でしたが、農道を通ってグダニスク（旧名ダンチヒ）湾に臨む丘陵の牧場に立ってバルチック海を遠望したりして、5時半マールボルク駅着、ここでパニ・クシャと大学の運転士と別れ、急行一路ワルシャワへ、10時11分中央駅着、ホテルに帰って夜半の夕食、そして荷物の整理などを終って就寝したのは午前の2時でした。

5月26日はまた早暁に起床、8時ホテルをチェック・アウトして外務省の車で空港に送られ、9時25分ポーランドの土地を離陸してソ連モスクワに飛んだ次第で、全くあわただしいコペルニクス古蹟遍歴の旅でありました。従って本稿もまたあわただしい走り書きで、その点読者諸君にお詫びする次第です。



フロムボルク・カテドラル内のコペルニクス記念祭壇

に見える。

Copernicus は、ポーランドやドイツやヨーロッパに属する以前に全ての人間にとって普遍的であり、それから得る大いさは単に我々が持つ関心の強弱に比例するはずである。

偉大な Copernicus を重複の多い言語でより偉大化せず、彼の立つ時点を歴史的変遷過程の一部として解明する論文で埋まるのは、何年祭の特集号であろうか。